

副助詞サエ（サへ）の用法とその変遷 —ダニとの関連において—

鈴木 ひとみ

1. はじめに

現代語の副助詞サエには、主文において「添加・累加」「意外・極端」「類推」等を表す用法と、仮定条件句内において「最低条件・十分条件性」「反復」等を表す用法とがあることが知られている⁽¹⁾。しかし主文の用法と条件文の用法との関係は明らかではない⁽²⁾。ダニの条件用法との関連も示唆されているが⁽³⁾、サエ(サへ)の条件用法について歴史的に考察した論考は管見の限りでは見当たらない。現代語のサエについて考える上でも、サへの歴史的な変化をダニとの関連において検討することが必要である。

本稿では、上代から近世にいたるサへ・ダニの用法の変化を統一的な枠組を用いて記述するとともに、サへの条件用法がいつどのように派生したか明らかにすることを目的とする。サへの変化が大きい中世以降については資料の全例調査を行い、計量的な変化も捉える。そして歴史的な変化をふまえた上で、現代語のサエが多様な用法を持つ理由に説明を与える。

調査に用いた資料は論文末尾に記載し、用例には巻・ページ・行数を添えた。

2. 理論的枠組

2. 1. 分類基準

サエ(サへ)およびダニ・スラの用法を分類する基準として、「当該事態の成立」「対照事態の成立」「実現可能性とその観点」「望ましさの有無」という要素を考える。

2. 1. 1. 当該事態の成立

副助詞によってとりたてられる当該事態（「太郎さえ来る」なら「太郎が来る」）が成立・不成立・未成立のいずれであるかを言う。サエの場合は否定辞も含めたものが当該事態となる。

2. 1. 2. 対照事態の成立

当該事態と範列関係にあり対照される対照事態（「太郎さえ来る」なら「次郎が来る」など）(4)が現実内で成立しているか・期待内で成立しているか・不問に付されているかを言う。

「期待内成立」とは、現実世界ではなく話者の心的世界で成立すること、簡単に言えば「それが成立するはずだ」という話者の予想・期待があるということである(5)。

2. 1. 3. 実現可能性とその観点

当該事態の実現可能性が話者によって高いと評価されているか・低いと評価されているかを言う。サエの場合は「実現可能性が低い」ことを表すと言える。絶対的な評価である場合と、対照事態との関係における相対的な評価である場合がある。

2. 1. 3. 1. 実現可能性の観点

どのような観点において実現可能性の高低を評価するかということについて、A 事態内容・B 成立した事態の数量・C 条件として働く事態の数量という三つの観点が考えられる。

A 事態内容

当該事態の内容が平凡だったり前後が結びつきやすい要素であれば実現しやすい（実現可能性が高い）と評価され、内容が極端だったり前後が結びつきにくい要素であれば実現しにくい（実現可能性が低い）と評価される。

B 成立した事態の数量

少数の事態が成立することは実現しやすい（実現可能性が高い）と評価され(6)、多数の事態が成立することは実現しにくい（実現可能性が低い）と評価される。例えば「太郎が合格する」と「太郎が合格し、次郎が合格し、三郎が合格する」とを比較すると、前者が成立する可能性は高く、後者が成立する可能性は低い。ここで注意すべきは太郎・次郎・三郎それぞれの成績（合格しやすさ）という質的な問題は考慮に入れないということである。サエは「太郎が合格し、次郎が合格し、三郎さえ合格した。」のように後者で用いる。

C 条件として働く事態の数量

多数の条件が複合して帰結事態を成立させることは実現しやすい（実現可能性が高い）と評価され、少数の条件で帰結事態成立に十分であるということは実現しにくい（実現可能性が低い）と評価される。

例えば「懸賞に当たり、恋人ができ、試験に受れば、幸せだ。」のように、幸せな気持ちにさせるような事態がいくつも複合して「幸せだ」という感情が成立することはたやすいが、それに比べると「懸賞に当たれば、幸せだ。」のように単独の事態の

力で「幸せだ」という感情を成立させることは難しいと言える。サエは「懸賞にさえ当たれば、幸せだ。」のように後者で用いる。

従来サエの実現可能性について論じられる時に問題とされるのはAの観点のみであったが(m)、BCの観点を導入することによってサエの用法全体に共通性を見ることが出来る。

2. 1. 4. 望ましさを有無

望ましさを有無は主にダニの用法と関連する要素である。「望ましい事態」とは実現することが望ましいと話者が判断する事態であることを言い、「最低限の願望」とは望ましい事態のうち、その順位がもっとも低い事態を願望であることを示す。

2. 2. 用法の概観

分類基準で示した要素の組み合わせにより用法を分類する。用法名とその意味は時代を通じて共通であり、異なる形式によって表されていても同じ意味の要素があれば同じ用法名で呼ぶこととする。

2. 2. 1. 添加

【当該事態成立／対照事態現実内成立／実現可能性低い（事態数量多数）】

(1) 此由ヲ仰ラルハニ、畏テ宣旨ヲ承テ、心ノ中ニ思ケルハ、ヒルタニモチキサキ鳥ナレハエカタキヲ、五月ノ空ヤミフカク、雨サヘフリテ云ハカリナシ。(十訓抄 10-146-9)

「鳥が小さい」「空の闇が深い」(対照事態)と「雨が降っている」(当該事態)とがともに成立する。(鳥の捕獲に不利な)事態が多数成立していることを表す。対照事態と当該事態の間に内容的に実現しやすいかどうかという尺度は存在しないが、多数の事態が同時に成立しているというそのことが実現可能性の低い特別なことだという評価がある。

2. 2. 2. 極限添加

【当該事態成立／対照事態現実内成立／実現可能性低い（事態数量多数・事態内容）】

(2) 猶御車宿の妻戸にゐて、ふるき物はいはじ、あたらしうしたるつかはしら、しとみなどをさへ破りたりけり。(宇治 181-10)

「ふるい物を壊す」(対照事態)に加えて「あたらしい物を壊す」(当該事態)も成立しているという点で、多数事態の成立＝実現可能性が低いことを表す(添加)と同じ。しかし「ふるい物を壊す」のは普通だがそれに比べて「あたらしい物を壊す」のは実現しにくいという事態内容についての尺度が存在する点が異なる。この用法は事態の数量と内容という二つの観点で「実現可能性が低い」という評価を与えている(8)。

2. 2. 3. 極限

【当該事態成立／対照事態不問／実現可能性低い（事態内容）】

- (3) ただこの亀寿が事思ひ煩ひて、露のごとくなる我が身さへ、消え侘びぬるぞ
（太平記 10-326-1003）

当該事態「露のようにいつ消えてもいい自分が消えられずにいること」は内容的に実現可能性が低い極限的な事態であることを表す。それによって、「亀寿のことが心配であること」の程度の極限性を示すことになる。対照事態は不問に付され、当該事態の極限性のみにスポットが当たっている用法である。

2. 2. 4. 極限類推

【当該事態成立／対照事態期待内成立⁽⁹⁾／実現可能性低い（事態内容）】

- (4) （きれいなおかみさんを見て）女でさへふるひ付くものをネ。ましてや男は
尤な事さのう。（浮世風呂 216-15）

内容的に実現可能性が低い「女が美しい女に惹かれる」という当該事態が成立するのだから、より実現可能性の高い「男が美しい女に惹かれる」という対照事態は当然成立するはずだという話者の判断を表す。「まして・いわんや」といった表現で対照事態が明示されることが多い⁽¹⁰⁾。

2. 2. 5. 限定類推

【当該事態成立／対照事態期待内成立／実現可能性低い（条件少数）】

- (5) かうしてゐるさへ腹の立つに、わが眼の前で、別の妻などを持たせてはあら
れうものか？（エソポ 479-6）

「夫が愛玩する犬に嫉妬して家出をしている今の状態だけでも腹が立つ」という当該事態が成立しているのだから、「今の状態に加えて別の妻を迎えるようなことがあつたらなおさら腹が立つ」という対照事態も当然成立するはずだという話者の判断を表す。

当該事態は対照事態よりも実現可能性が低いと評価されているが、「犬→腹が立つ」「犬+別の妻→腹が立つ」という関係は、「腹が立つ」が成立する要因として「犬」「犬+別の妻」と足し算式に要素が並ぶスケールを想定できる。「腹が立つ」を成立させる要因が少ない（犬だけ）ほど事態全体の実現可能性が低く、多数の要因が複合する（犬+別の妻）ほど実現可能性が高くなるということである。「犬だけで腹が立つ」「別の妻も加わって腹が立つ」という全体の対照を考えると〈極限類推〉との区別は微妙で、一バリエーションと考えてもよい。

2. 2. 6. 条件限定

【当該事態未成立／対照事態不問／実現可能性高い（事態少数）】

条件一帰結関係でみた場合【当該事態成立／対照事態不問／実現可能性低い（条件少数）
／望ましい事態】

(6) 住吉と人はいへ共住にくし銭さへあれはとこも住よし（醒醉笑 4・153・4）

仮定条件句に用い、「銭があれば、それだけで、住みよいといえる」という趣旨。条件句の部分が「それだけで十分である」と限定される少数の事態。少数の事態は実現可能性でいえば高いものである。

しかし、〈限定類推〉でも見たように、「少数の条件であることを成立させる」ということは実現可能性が低いものと評価できる。そこで、〈条件限定〉を条件句と帰結句との関係で見ると、実現可能性は低く、にもかかわらず、条件関係全体として成立するのだと主張されていることになる(11)。

〈条件限定〉で取り立てられる条件が帰結事態にとって中心的なものか周辺のものかという点については議論が分かれている(12)。しかし実際にはそのような事態内容の観点とは関係ない(13)。

「望ましい事態」という意味制約がある。

2. 2. 7. 反復条件

【当該事態成立／対照事態不問／実現可能性高い（事態少数）】

条件一帰結関係で見た場合【当該事態成立／対照事態不問／実現可能性低い（条件少数）】

(7) 半兵衛さへ見れば敵のやうにいふ人ぢや。世間する若い者呼びに來まいものでもない。（心中宵庚申 452・9）

「半兵衛を見る」という事態が成立する時は、いつも「敵のように言う」ことも成立することを表す。少数の条件で帰結事態が成立することを表す点は〈条件限定〉と同じ。ただし、反復的に実現している事態に限る。「望ましい事態」という意味制約はない。

2. 2. 8. 最低限願望

【当該事態未成立／対照事態不問（否定）／実現可能性高い／最低限の願望】

(8) 田舎に候ひて、「故殿失給にき」とうけたまはりて、いま一度参りて、御ありさまをだにもおがみ候はむと思て、恐々参り候ひし。（宇治 186・14）

「御ありさまをおがむ」という望ましい事態の中でも最も譲歩した最低限の事態に限定して願望する。「せめて～だけでも」と訳出される。対照事態は背景化し不問に付されているが、より望ましい事態を想定することが可能。より望ましい事態の成立は諦めるが、という含意があるので、対照事態の否定と考えることもできる。

「せめてこれだけ実現すれば」と譲歩する事態は、たやすくかないような実現可能性の高い事態である。評価の観点は「成立事態の数量（少数）」「事態内容（ささいなこと）」どちらもあり得るが、限定の意味が働くためその違いはさほど明確ではなくなる。

2. 2. 9. 最低限条件

【当該事態未成立／対照事態不問（否定）／実現可能性高い／最低限の願望】

(9) 秋山のしたひが下に鳴く鳥の声だに（谷）聞かば何か嘆かむ（金山舌日下鳴鳥音谷聞何嘆）（万葉集 2239）

「声だけを聞く」という願望の順位は最低限の望ましい事態が成立することを仮定する。対照事態として「実際に逢うことができる」等の事態を想定可能。

意味としては〈最低限願望〉と同じもので、述語の形式が異なるだけだが、後の展開が異なるため別の用法として立てる。

2. 2. 10. 最低限否定

【当該事態不成立／対照事態不問（否定）／実現可能性高い／（最低限の願望）】

(10) 髪だに（谷）も搔きは梳らず沓をだに（谷）はかず行けども（髮谷母搔梳履乎谷不著雖行）（万葉集 1807）

(11) あやしと、人知れずこよひをこゝろみんと思ふほどに、はては消息だになくてひさしくなりぬ。（蜻蛉日記中 110-14）

実現可能性が高い当該事態が不成立に終わることを表す。

「最低限の願望」という意味は、「せめて髪ぐらひは梳かすべきだ」「せめて手紙ぐらひ欲しい」という意味が読み取れるかどうかによる。読み取れる場合と読み取れない場合があり、読み取れる場合の意味は〈最低限願望〉と〈最低限条件〉と等しくなる(14)。読み取れない場合も「実現可能性が高い」という点は共通している。

以上、十用法がサへ・ダニ・スラの交渉の舞台となる意味領域の全体である。

3. 用法の変遷

サへ・ダニ・スラがどのような用法を持っていたか、時代ごとに記述する。上代・中古については先行研究をもとに状況を概観するとどめるが、中世以降は特にサへの用法に大きな変化があるため、資料の全例調査を行い詳しく検討する。中世は1500年前後で用法の分布が変わるため、1500年以前を中世前期、以後を中世後期とした。

3. 1. 上代

上代はダニ・スラ・サへの意味領域にすみわけがある。

3. 1. 1. 上代のスラ

スラは〈極限〉〈極限類推〉の用法を持ち、全体として「実現可能性が低い」ことを表すことで共通する。

〈極限〉

(12) 巖すら (尚) 行き通るべきますらをも恋といふことは後の悔あり (石尚行応通建男恋云事後悔在) (万葉集 2386)

〈極限類推〉

(13) 言問はぬ木すら (尚) 妹と兄ありといふをただ独子にあるが悲しき (言不問木尚妹与兄有云乎直独子尔有之苦者) (万葉集 1007)

中古以降、スラは漢文訓読の文脈に限定されて用いられ和文脈からは退くので、以後は考察から外すことにする。

3. 1. 2. 上代のダニ

上代のダニは、対応する述語が希望・意志・命令・仮定条件句・否定述語に限られる (15)。希望・意志・命令に続くものを〈最低限願望〉、仮定条件句に続くものを〈最低限条件〉、否定述語に続くものを〈最低限否定〉とする。

〈最低限願望〉希望・意志・命令

(14) 言繁み君は来まさずほととぎす汝だに (太尔) 来鳴け朝戸開かむ (事繁君者不来益霍公鳥汝太尔来鳴朝戸將開) (万葉集 1499)

〈最低限条件〉仮定条件句

(15) 秋山のしたひが下に鳴く鳥の声だに (谷) 聞かば何か嘆かむ (金山舌日下鳴鳥音谷聞何嘆) (万葉集 2239)

上記二用法は未成立の「実現可能性が高い」事態に限定して願望するもので、「最低限の願望」と一般化できる。実現可能性の評価観点は「事態内容」「成立事態の数量」いずれもありうる。

〈最低限否定〉否定

(16) 髪だに (谷) も搔きは梳らず沓をだに (谷) はかず行けども (髪谷母搔梳履乎谷不著雖行) (万葉集 1807)

「最低限の願望」の意味はあるものとなないものがあるが、「実現可能性が高い」事態に限定している点では通じる。否定述語は「マイナスの既定」(此島 1966) と言えるものであり、否定辞を含めて見ると「実現可能性が低い」とも読めることから、確定の肯定述語に用いる契機になり、中古の〈極限〉〈極限類推〉につながっていくことになる。

3. 1. 3. 上代のサへ

成立事態が多数という観点で「実現可能性が低い」ことを表す〈添加〉の用法を持つ。

〈添加〉

(17) をとつひもきのふもけふも見つれども明日さへ (左倍) 見まく欲しき君かも
(前日毛昨日毛今日毛雖見明日左倍見巻欲寸君香聞) (万葉集 1014)

3. 2. 中古

サへ・ダニともに用法は拡大するが、特にダニがさかんに用いられ多用な用法を持つ。

3. 2. 1. 中古のダニ

「実現可能性が高い事態に限定する」という意味を持つ〈最低限願望〉〈最低限条件〉〈最低限否定〉の三用法は上代から続いている。

〈最低限願望〉

(18) 「今日だにのどこかと思ひつるを、便なげなりつれば。いかにぞ。身には山がくれとのみなむ」(蜻蛉日記上 42-14)

〈最低限条件〉

(19) かかる心だに失せなば、いとあはれになん思ふべき (源氏帚木 1-149)

〈最低限否定〉

(20) めづらしがりて、とみにたつべくもあらぬほど、星のひかりだに見えなくらきに、うちしぐれつゝ、木の葉にかゝるをとのをかしきを (更級日記 413-11)

このうち〈最低限否定〉は否定辞を含むと実現可能性は「低い」と読むことが出来る。一般に否定述語文は「肯定的事態の不成立」と「否定的事態の成立」という二通りの解釈が出来るが、前者から後者への読み替えが〈最低限否定〉の用例においても可能である (16)。

(21) [星のひかりだに見え]ず

= 「星のひかりという最低限の明るさ」が見えない。

(22) [星のひかりだに見え]ず

= 「星のひかりも見えない」という極限的な闇夜である。

(21)は「星のひかりが見える」という実現可能性が高い事態が不成立であるという解釈を示し、(22)は「星のひかりが見えない」という実現可能性が低い事態が成立するという解釈を示す。「実現可能性が低い事態が成立する」という意味を肯定述語でも表すことができるようになると、それは〈極限〉〈極限類推〉の用法と等しい。

〈極限〉

(23) 「よいぞよいぞと言ふなは蟬来にけるは。虫だにに時節を知りたるよ」(蜻蛉下 194-7)

〈極限類推〉

(24) 言ふかひなき心だにかく思へば、まして異人はあはれと泣くなり。(蜻蛉中

113-2)

この二用法は事態内容の観点で「実現可能性が低い」ことを表すもので、上代にはスラが用いられていた領域である。和文から退いたスラのあとを、〈最低限否定〉における反転を介してダニが埋めることになったと言える。

少数の条件という観点で「実現可能性が低い」ことを表す〈限定類推〉の用法も存在する。「限定」という意味は上代から直接続いているものだが、「実現可能性が低い」という意味が確立したことによって出現したものと考えられるだろう。

〈限定類推〉

(25) おくやまの思ひやりだにかなしきにまたあまぐものかゝるなになり(蜻蛉上 84-14)

こうして否定・肯定ともに「実現可能性が低い」用法が確立したことになる。以後は対照事態の有無によって否定述語の用例も〈極限〉〈極限類推〉に振り分けて考えることとする。〈最低限願望〉〈最低限条件〉については否定述語のような解釈の違いによる意味の反転は起こらないので、ダニの用法としては実現可能性が高い事態を願望する用法と実現可能性が低い事態の成立を表す用法とが並立することになる。

3. 2. 2. 中古のサへ

上代に引き続き〈添加〉の用法がある。

〈添加〉

(26) なげきつゝかへすころもの露けきにいとゞそらさへしぐれそふらん(蜻蛉上 43-15)

さらに事態内容の観点が導入され、〈極限添加〉の用法が生まれる。

〈極限添加〉

(27) 殿の君達、宰相の中将、四位の少将などをばさらにもいはず、左の宰相の中将、宮の大夫など、例はけ遠き人々さへ、御木丁の上より、ともすればのぞきつゝ、はれたる目どもを見ゆるも、よろづの恥忘れたり。(紫式部日記 260-10)

これは事態の数量・内容という二つの観点で「実現可能性が低い」評価を与えるものである。成立事態が多数であるという観点は〈添加〉〈極限添加〉全体で共通する。

3. 3. 中世前期

「実現可能性が低い」ことを表す助詞としてダニ・サへの領域が広がり、混同が進む。

3. 3. 1. 中世前期のダニ

中世前期のダニの作品別用例数は以下の通りである(17)。

ダニ中世前期

作品名	用例総数	極限添加	極限	極限類推	限定類推	条件限定	反復条件	最低限願望	除外	不詳
宇治拾遺物語	58		19	20	1	9		5		4
保元物語	18		7	7		4				
平治物語	8		4	3		1				
高野本平家物語	94	6	41	25	6	11				5
閑居友	8		2	3		1		1		1
十訓抄	27		11	7	1	6		2		
沙石集	29	2	6	9	2	7		2		1
とはずがたり	65		26	11	3	9		16		
曾我物語	68	2	25	25	1	14				1
土井本太平記*	39		9	23	3	3	1			
義経記	64	1	20	21	2	18	1	1		
合計	478	11	170	154	19	83	2	27	0	12

〈最低限願望〉の用例数は減少傾向にある。

(28) 田舎に候ひて、「故殿失給にき」とうけたまはりて、いま一度参りて、御ありさまをだにもおがみ候はむと思て、恐々参り候ひし。(宇治 186-14)

一方で、「実現可能性が低い事態の成立」を表す用法はさかんに用いられる。

〈極限〉

(29) 一匹もちたる馬をだにも、けならかにかはず、(曾我 177-16)

〈極限類推〉

(30) 大官司「心うきことに候。御神はおはしまさぬか。下臈の無禮をいたすだに、たち所に罰せさせおはしますに、大官司を、かくせさせて御覧ずるは」(宇治 138-2)

〈限定類推〉

(31) 供養し奉りなどして、いくばくも経ぬ程に、父うせにけり。それだに思ひなげくに、引つゞくやうに、母もうせにければ、泣きかなしめども、いふかひもなし。

(宇治 261-14)

すでに見たように、中古にはダニの「最低限の願望」という意味を表す用法と「実現可能性が低い事態」という意味を表す用法が並立することになった。このうち、前者が衰退し、ダニ全体として後者の意味へ統一しようとする動きが〈極限〉〈極限類推〉の増加に見て取れる。

この動きに伴って〈最低限願望〉の意味も「最低限の願望」から「実現可能性が低い事態」へとシフトし、〈条件限定〉〈反復条件〉の用法へと変わっていくことになる。

〈条件限定〉

(32) されば心にだにもふかく念じつれば、佛も見え給なりけり。(宇治 75-16)

(33) 相撲は、力によらず、手だにまされば、みぎわまさりの相手をうつものをおもひだして、(曾我 82-15)

〈反復条件〉

(34) そののちは雷だになれば、おもひいでられておそろしき。(平治 289-16)

これらの用例は中古までのような「譲歩した最低限の願望」という意味はなく、より客観的な事態間の関係を述べるものとなっている。〈条件限定〉には望ましが感じられるが、〈最低限条件〉のような話者の願望とは異質である。

条件関係を表す文は、条件句と帰結句との関係で考えれば「条件として働く事態が少数である」という観点によって「実現可能性が低い」という評価を適用する余地がある。〈最低限条件〉はこのように条件句と帰結句との関係に注目し、「少数の条件」という観点を導入し「実現可能性が低い」と読むことが、たとえ後付の解釈であるにせよ、可能だった。そのため、「願望から実現可能性へ」という意味の統一の流れの中でダニ全体としての共通性を維持することができ、変質はしながらも生き残りに成功したのであろう。一方、〈最低限願望〉にはそのように「実現可能性」という意味を読み込む余地がなかったため、意味の変質は起こらず、衰退に向かうことになる。

この頃、少数ながらダニに〈極限添加〉の用法が見える。

〈極限添加〉

(35) 昔ノ大王ハ國ノ位ヲ捨テ、一乗ノ御法ヲ習ヒ、菜ヲツミ水ヲ汲、千歳ノ給仕ヲダニモ〔シ〕給ケルゾカシ。(沙石集 410-7)

本来はサへとあるべきところであり、サへととの混同がすすんでいることがわかる(18)。

3. 3. 2. 中世前期のサへ

中世前期のサへの作品別用例数は以下の通りである。

サへ中世前期

作品名	用例総数	添加	極限添加	極限	極限類推	限定類推	条件限定	反復条件	除外	不詳
宇治拾遺物語	6	1	3	1	1					
保元物語	6	1	1		1	1			2	
平治物語	4	2		1					1	
高野本平家物語	20	18	1							1
閑居友	0									
十訓抄	6	3	3							
沙石集	2	1	1							
とはずがたり	80	29	29	12	4	5				1
管我物語	29	4	5		3		1		16	
土井本太平記*	33	15	8	6	2				1	1
義経記	9	4	2	2	1					
合計	195	78	53	22	12	6	1	0	20	3

中古から引き続き〈添加〉〈極限添加〉の用例が数多くある。

〈添加〉

(36) 此由ヲ仰ラルハニ、畏テ宣旨ヲ承テ、心ノ中ニ思ケルハ、ヒルタニモチキサ

キ鳥ナレハエカタキヲ、五月ノ空ヤミフカク、雨サヘフリテ云ハカリナシ。(十訓抄 10-146-9)

〈極限添加〉

(37) 猶御車宿の妻戸にゐて、ふるき物はいはじ、あたらしうしたるつかはしら、しとみなどをさへ破りたきけり。(宇治 181-10)

また、中古までは必須だった「対照事態の現実内成立」という要素が不要になり、事態内容の観点でのみ「実現可能性が低い」ことを表す〈極限〉〈極限類推〉の用法が成立する。

〈極限〉

(38) 兄の万寿をば、五大院右衛門が、隠すべき方ありとて、今朝、いつ方へやらん具足しつれば、心安く思ふなり。ただこの亀寿が事思ひ煩ひて、露のごとくなる我が身さへ、消え侘びぬるぞ(太平記 10-326-1003)

〈極限類推〉

(39) 恩愛の道深ければ、いかなる鳥獣さへも子を思ふ心浅からず。いはんや人倫においてをや。いはんや一子においてをや。(太平記 34-1268-438)

これによって「実現可能性が低い」という共通性は維持しながら、評価の観点は事態数量・事態内容のどちらでも可能であることになり、用法が広がった。

3. 4. 中世後期

サへに条件用法が成立し、ダニとの並行から移行へと進む。

3. 4. 1. 中世後期のダニ

中世後期のダニの作品別用例数は以下の通りである。同資料内での用例数をサへと比較するとわかるように、助詞全体としての衰退が始まっている。

ダニ中世後期

作品名	用例総数	極限添加	極限	極限類推	限定類推	条件限定	反復条件	最低限類推	除外	不詳
湯山連句抄	2					2				
天正狂言本	0									
天草版平家物語	10		3	4		3				
天草版伊曾保物語	0									
虎明本狂言集	9		3	3			2			1
御伽草子	32	1	12	15		3				
合計	53	1	18	22	0	8	2	0	0	1

〈極限〉

(40) 同じ年の六月二日に成親卿をば公卿の座へ出だし奉って物を進(まゐ)らせたれども、胸せき塞がって、お箸をだにも立てられなんだ。(天草平家 53-9)

〈極限類推〉

(41) 昼だに人も問ひ来ぬ山里の柴の庵の内であれば、夜更けて誰かは尋ねうぞ？

(天草平家 104-8)

〈条件限定〉

(42) ありし六日の暁を限りとだに思うたならば、なぜに後の世と契らいではあらうぞ？ (天草平家 281-4)

限られた資料の中ではあるが、〈最低限願望〉の用法はすでに見当たらず、ダニ本来の用法が衰退してしまっている。

3. 4. 2. 中世後期のサへ

中世後期のサへの作品別用例数は以下の通りである。

サへ中世後期

作品名	用例総数	添加	極限添加	極限	極限類推	限定類推	条件限定	反復条件	除外	不詳
湯山聯句抄	1				1					
天正狂言本	3		1	1						1
天草版平家物語	22	3	1	5	6	1	4	2		
天草版伊曾保物語	7			1	1	1	4			
虎明本狂言集	95	2	3	12	30	6	39	1	2	
御伽草子合計	30	4	5	4	9	1	2	0	4	1
合計	158	9	10	23	47	9	49	3	6	2

〈添加〉

(43) 上れば白雲が皓々として聳え、下れば青山峨々として岸高う、松の雪さへ消えやらず、(天草平家 260-2)

〈極限添加〉

(44) 合夜は人の手まくらこぬ夜はおのか袖まくらまくらあまりて床ひろしよれまくらこちよれまくらまくらさへうとむななよ枕はらはらとふる雨も…(天正狂言本 54ウ 01)

〈極限〉

(45) 敵の陣には蠅さへも飛びませぬ。(天草平家 153-18)

〈極限類推〉

(46) サレハ、只本官サへ泥土ノ如ニ見ナスヘキニ、況ヤ偽官ノムホン人ノナス官ヲヤ。(湯山聯句抄 27 オ 9)

〈限定類推〉

(47) かうしてゐるさへ腹の立つに、わが眼の前で、別の妻などを持たせてはあられうものか？ (エソボ 479-6)

以上は中世前期から見られる用例である。

中世後期にいたって、サへの〈条件限定〉〈反復条件〉が成立する。両用法は中世前期に見たように変質を経た後のダニの条件用法における意味構造をそのまま受け取ったものである。

(条件限定)

(48) 温湯をば飲むとも、咽に指をさへ入れずは、苦しかるまじい。(エソボ 412・5)

(反復条件)

(49) 京にはやる、おきやがりこぼしやよ、とのだに見れはつひころぶ、がってんじや、(虎明上 281-14)

中世前期からサへとダニの混同が進んでおり、これも混同の定着かと考えられるが、サへの側も様々な観点によって「実現可能性が低い」ことを表す形式として用法を拡大していたため、ダニの用法を受け取ることができたのだろう。「少数の条件」という観点では〈極限類推〉と近い〈限定類推〉が先行したのではないと思われる。

3. 5. 近世

ダニは衰退し、サへが優勢となる。現代に近い分布を示している。

3. 5. 1. 近世のダニ

近世のダニの作品別用例数は以下の通りである。

ダニ近世

作品名	用例総数	極限追加	極限	極限類推	限定類推	条件限定	反復条件	最低限類推	除外	不詳
きのうはけふの物語	0									
醒醉笑	11		2	7		1				1
雑兵物語	1			1						
近松合計	10		4	4				1		
遊子方言	0									
辰巳之園	0									
通言総集	0									
傾城買四十八手	0									
傾城買二筋道	0									
観井茶筋道中神韻集	0									
青樓風之世界錦之基	0									
東海道中膝栗毛	3									3
浮世風呂	3									3
春色梅兜誉美	1									1
春色辰巳園	1		1							
合計	30	0	7	12	0	1	0	1	7	1

衰退が進み、ほとんど使われなくなっている

(極限)

(50) われらは野兵糧だにもなし(醒醉笑 144-17)

(極限類推)

(51) 寒夜には水を一口二口のむたにも腹中にあたるは習ひそかし。況や湖水を皆

飲とあれはよきに養生被成よ。大略腹を煩給ふ事と申あへり。(醒醉笑 1-45-2)

3. 5. 2. 近世のサへ

近世のサへの作品別用例数は以下の通りである。

サへ近世

作品名	用例総数	添加	極限添加	極限	極限類推	限定類推	条件限定	反復条件	除外	不詳
きのうはけふの物語	4			1	3					
醒醉笑	55	2	1	18	25	2	5			2
雑兵物語	9			1	6		2			
近松合計	150	18	19	35	36	7	25	3	4	2
遊子方言	2				1		1			
辰巳之園	1						1			
通言総籙	0									
傾城買四十八手	5		1		2		2			
傾城買二筋道	2		1		1					
櫻井茶屋道中辨語録	2				2					
青楼裏之世界編之原	4			1	1		2			
東海道中膝栗毛	25	1	1	5	3	1	12	2		
浮世風呂	17		1	3	7		6			
春色梅児鬘美	32	11	5	6	6		3			1
春色辰巳園	24	3	5	5	7		4			
合計	332	35	34	75	100	10	63	5	4	5

広範な意味領域をカバーし、用例数も多い。

〈添加〉

(52) 旅衣昨日今日とは思へども。都を出でて日数さへ。四日市にも程近き追分。にこそ着きにける。(博多小女郎波枕 350-4)

この例は「日数が四日であること」と「地名が四日市であること」をかけているわけだが、複数の事態の成立を表す〈添加〉が洒落の表現に多く使われるのが近世の特徴である。

以下、他の用法の用例を挙げる。

〈極限添加〉

(53) おのれまでが氣違ひとは。エ、女房さへあなどるか。(傾城反魂香 139-6)

〈極限〉

(54) そなたは随分の人にてあるか。七日のぬかといふ字さへ見知りあらぬ(醒醉笑 3-101-8)

〈極限類推〉

(55) (きれいなおかみさんを見て)女でさへふるひ付くものをネ。ましてや男は尤な事さのう。(浮世風呂 216-15)

〈限定類推〉

(56) 最前の豆腐屋がきらずきらずと売つたるさへ。心にかゝる其の上今の石売嬢

どもが。馬の杵が打たれぬ打たずに引いて帰れとは如何にしても氣がよりなり。(堀川波鼓 58-11)

(条件限定)

(57) 住吉と人はいへ共住にくし錢さへあれはとこも住よし (醒醉笑 4-153-4)

(58) 類へ乗せさへすれば手つかずに髷が出来る。(浮世風呂 119-3)

(反復条件)

(59) 半兵衛さへ見れば敵のやうにいふ人ぢや。世間する若い者呼びに來まいものでもない。(心中宵庚申 452-9)

(60) 米こふはどふもおれせへ来りやア、あのとふりヨ。(春色梅暦 79-13)

用例数が増えていること以外に大きな意味の変化などはない。

3. 6. まとめ

各時代の用法ごとの用例数は以下ようになる。

時代	助詞	用例総数	添加	極限添加	極限	極限類推	限定類推	条件限定	反復条件	最低限願望	除外	不詳
中世前期	ダニ	478	0	11	170	154	19	83	2	27	0	12
	サヘ	195	78	53	22	12	6	1	0	0	20	3
中世後期	ダニ	53	0	1	18	22	0	8	2	0	0	1
	サヘ	158	9	10	23	47	9	49	3	0	6	2
近世	ダニ	30	0	0	7	12	0	1	0	1	7	1
	サヘ	332	35	34	75	100	10	63	5	0	4	5

* 除外…「あまつさへ」「いまだに」

限られた資料の中ではあるが、数の上でもダニが優勢だったものがサヘに逆転されていく様子がわかる。

以上をまとめてサヘ・ダニ・スラが表す意味領域の変遷を図に示す(次頁)。ダニの網掛け部分は「最低限の願望」という意味を保持しているものである。

左右に渡る配列はひとつの物さしの上でのグラデーションではない。図表上部に示したようないくつかの異なる基準を持つ用法を並べたもので、隣り合う用法との共通性をもとに用法が拡大されているのである。

このように、サヘは様々な観点を取り入れて用法を拡大し、何らかに「実現可能性が低い」と評価できる部分の全体を覆うに至った。

サヘ・ダニと隣接する他形式については、最低限の願望を表す「せめて」は中世から出現し(19)、マデは中古から(添加)(極限添加)にあたる用法を持つ(20)。また次節に述べるように現代語では(限定類推)はダケデモを用いるのが普通である。

		実現可能性が低い						実現可能性が高い
		極限的な事態内容				条件が少数		
多数事態が成立								
	添加	極限添加	極限	極限類推	限定類推	条件限定	反復条件	最低限願望
上代	サヘ		スラ		—	ダニ(願望)		
			ダニ(否定)		—			
中古	サヘ		ダニ		ダニ(願望)			
	(マデ)							
中世前期	サヘ						(せめて)	
	(マデ)		ダニ				(ダニ)	
中世後期	サヘ						(せめて)	
	(マデ)		ダニ					
近世	サヘ						せめて	
	(マデ)		(ダニ)					
近現代	サエ						せめて	
	マデ		ダケデモ					

4. 現代語との関連

4. 1. 現代語の状況

現代語ではダニは「予想だにしない」のような慣用的な例を除けば使われない。サエは次のようにほぼ近世と同じ用法を持つ。

主文の用法

〈添加〉

(61) 風の音や草木のそよぎや、夜の静けさや人々の立てる靴音さえもが何かしらの暗示を含んだように重くよそよそしくなり、(世界)

〈極限添加〉

(62) その心持が現在となつてはハッキリ領けるばかりでなく、それに対して同

情をさえ禁じ得ないくらいですから。(痴人)

〈極限〉

(63) この小さな手風琴の響きの中にさえ、僕は僕の心をもぐりこませることができるのだ。(世界)

〈極限類推〉

(64) 日本人にさえあまり交際をもたないのに、そういう外国人と近付になったのは不思議だった。(心)

〈限定類推〉

(65) 一体この部屋は二人で寝てさえ狭苦しい上に、ナオミの肌や着物にこびりついている甘い香と汗の匂とが、醗酵したように籠っている。(痴人)

条件用法

〈条件限定〉

(66) それがあなたに通じさえすれば、私は満足なのです。(心)

(67) 金さえ払えば誰にだって買える。(世界)

〈反復条件〉

(68) 男と女が手を組み合って踊りさえすれば、何かその間に良くない関係があるもののように臆測して、直ぐそう云う評判を立てる。(痴人)

現代語の特徴としては、〈限定類推〉は衰退しており通常ダケデモを用いること、また、〈添加〉もマデが使われることが多くなっていることがある。主文においては事態内容の観点において実現可能性が低いことを表す点で共通する〈極限添加〉〈極限〉〈極限類推〉が主な用法となり、事態数量の観点が退いているといえる。ただし条件が少数であることを示す〈条件限定〉〈反復条件〉についてはさかんに用いられている。

4. 2. 主文の用法と条件文の用法

現代語においては、観点が事態内容か事態数量かという点でも主文の用法と条件文の用法で大きく分かれる結果になっている。さらに、両者の重要な違いは少なくとも二点ある。一点めは主文のサエは前項と後項の結びつきに対して「実現可能性が低い」という意味を与えるのに対して、条件文の用法では条件句と帰結句の関係に意味を与えていること。二点めは〈条件限定〉は後件が望ましい事態でなくてはならず、〈反復条件〉は望ましい事態でなくてもよいが反復的に成立する事態でなくてはならないというように、条件用法は主文の用法にはない意味制約を持つことである。

このような違いがあるために主文のサエと条件文のサエの関係を論じることは困難だったが、歴史的な変遷をふまえた上で、説明の一案を以下に示してみたい。

4. 3. 条件用法の特殊性

サエの条件用法はダニの条件用法を引き継いだものであり、〈最低限条件〉までさかのぼることができる。

この用法はもともと「実現可能性が高い事態に限定する」というものだった。中古から中世にかけて、〈最低限否定〉の用例において「実現可能性が高い事態の否定」から「実現可能性が低い事態の成立」へという解釈の変化が起り、スケールの逆転した用法を得る。さらにダニ全体として「実現可能性が低い」という意味への統一が進み、「最低限の願望」という意味は後退していく。そのような動きの中で、ダニの条件用法は条件句と帰結句の関係性を少数の条件という観点で「実現可能性が低い」と読まれるようになった。それによって極限系用法と共通性を維持していたわけだが、その状況がそのままサへに引き継がれることになる。

意味制約についても、ダニが本来持っていた「最低限の願望」という意味が後退した後も未定事態を表す〈条件限定〉は望ましい事態を表すという偏りが残り、〈反復条件〉は現実成立済みの事態であることによって望ましが問題にならなくなったのだと考えることができる。

5. むすび

どのように派生してきたか不明確であったサエ（サへ）の条件用法について、ダニとの関連において歴史的に検討してきた。

本稿で提示した枠組は、サエ（サへ）の表す意味領域を検討するために設定したものであり、副助詞全体を覆うものではない。例えばモやマデの用法のうち、サエ（サへ）と重なる意味については本稿の枠組で分析することができるが、それには収まりきらない用法もある(21)。副助詞が表す意味領域は非常に広く、それぞれの形式ごとに多様な用法を持つ理由・派生の経緯も異なる。しかし今回扱ったサエ（サへ）・ダニ・スラ以外の副助詞についても、いくつかの基準を設定し統一的に用法の広がりや変遷の様子を分析することは可能であろう。

[注]

- (1) 国研(1951)、沼田(1986,2000)、中西(1995)、三井(1997)、菊地(1999)、星野(2003)など。
- (2) 山中(1991)・坂原(1986)は条件文の作用によりスケールが逆転すると説明する。三井(1997)「最たるもの」、星野(2003)「不在の自覚」など主文との共通性を論じるものもある。野田(1995)や沼田(1986,2000)は関係付けを行わない。
- (3) 丹羽(1995)など。
- (4) ここでは述語句を含む事態全体を対照していると考え、具体的な対照範囲については措く。菊地

(1999)は現代語において対照範囲が名詞句であればサエ、述語句も含む場合はサエという使い分けがあることを指摘している。

(5) 「期待」の概念については井島(1996)の定義「予想・思い込み・希望など、言語主体の心的世界に生じる内容を、総じて「期待」と呼ぶ」に従う。

(6) 定延(1995)は「我々の住む現実世界は様々な出来事に満ち溢れているが、我々が心内に構築する認知世界は、どんな事態であれ起こりにくく、起こっていないのが普通(デフォルト状態)である。」(p. 241)と述べている。本稿も同様の見方に立つ。

(7) 坂原(1986)「段階の前提」、山中(1995)「EXPECT 値のスケール」、中西(1995)、三井(1997)、菊地(1999)等の尺度・スケール論はすべて事態内容の観点を問題にしているものと考えられる。

(8) 二つの観点は融合しやすく、普通はその区別は意識されない。モ・マデが並列と極限性を同時に表すのも同じような理由によるだろう。

(9) 期待内での成立は現実内での成立如何とは独立である。「女でさえ惹かれるのだから、男はなおさらだろうと思ったら、その通りだった。／思ったのに、実際はそうではなかった。／思うが、実際どうだかわからない。」いずれも可能。なお期待と現実が一致する場合は順接表現、一致しない場合は逆接表現が現れるが、このことは井島(1996)等に述べられている。

(10) 中古のダニと「まして」の照応について扱ったものに河原(1979,1983)がある。

(11) ここで条件関係全体に拡大してしまうことの問題については4節で述べる。

(12) 例えば丹羽(1995)は「周辺の」とし、三井(1997)は「最たるもの」とする。「周辺の」というのは主文のサエとの共通性を主張したいためと思われるが、それでは「君さえいれば」「VISA さえあれば(カード会社のCM)」といった表現に説得力がなくなる。内容ではなく数量という観点を導入する必要がある。

(13) 「少数の条件であるにもかかわらず事態を成立させるに十分である」というところから「中心的な強い条件である」という表現性は生まれやすいが、「せめて」など副詞を伴えば「譲歩した周辺の条件である」という意味にもなる。

(14) 加納(1938a) p.56「表現主体にとって、ある未定状態の事実が最悪の場合に直面して、実現への願望意欲にも拘らず、その事が否定せられたといふ風に理解し得べき場合が多いのである。」

(15) 加納(1938a)、此島(1966)、高山(2003)等に指摘がある。

(16) 茂木(1999)のNスコープ(否定辞を含まない)からWスコープ(否定辞を含む)への変化と考えることもできる。文意が変わらずスコープが変わることで、ダニの意味として読み取られるものは反転することになる。

(17) 土井本太平記についてはダニと他の副助詞との複合形を数えていない。サへについても同様。

(18) 此島(1966)等に指摘があるように、万葉集にもダニとサへの両伝ある歌が存在する。

「明日香河明日谷(一伝左倍) 見むと見へやもわが大君の御名忘れせぬ(万葉197)」

しかしこの場合はダニとサへが混同されているわけではなく、それぞれ違う意味を持つのだと考えられる。ダニなら「せめて明日だけでも会いたい」、サへなら「今日に加えて明日もまた会いたい」という

趣旨になる。

(19) 井手(1955)によれば、「ぎりぎりのところ止むを得ないので」の意を表す「せめて」は院政鎌倉期に現れ、希望すべき事柄の叙述や限定辞との呼応などの特徴を持つようになった。この意味では「せめては」の語形が優勢だったが、室町期に「せめて」に統一され現代と同じになった。「不本意ではあるがぎりぎりのところ最小限」という意味は本稿の「最低限の願望」と同じものと考えてよい。

(20) 小柳(1999)で整理されている中古のマデの用法から本稿の筆者が判断した。

(21) 例えば「やわらげ」のモヤ格助詞的用法のマデなど。

参考文献

- 赤塚紀子(1998)「条件文と Desirability の仮説」中右実編、赤塚紀子・坪本篤朗著『日英語比較選書3 モダリティと発話行為』pp. 1-97 研究社
- 井島正博(1996)「期待の表現機構」『成蹊国文』29
- 井手至(1955)『「せめて」について』『人文研究』6巻5号第2冊(『国語副詞の史的研究』1991,増補版2003 新典社に収録)
- 加納協三郎(1938a)「だに」「すら」の用法上の差異に就て」『国語と国文学』15-6
- 加納協三郎(1938b)「院政鎌倉期に於けるダニ・スラ・サへ」『国語と国文学』15-10
- 河原寛(1979)「副助詞「だに」について—「まして」との照応を中心に—」『園田女子大論文集』14
- 河原寛(1983)「副助詞「だに」について(補遺)」『園田学園女子大学論文集』18
- 菊地康人(1999)「サエとデサエ」『日本語科学』6
- 国立国語研究所(1951)『国立国語研究所報告3 現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版
- 此島正年(1966)「だに」「すら」「さへ(さえ)」『国語助詞の研究』pp.269-285 桜楓社
- 小柳智一(1999)「中古のマデ—第一種副助詞—」『国語学』199
- 坂原茂(1986)「“さえ”の語用論的考察」『金沢大学教養部論集(人文科学篇)』23-2
- 定延利之(1995)「心的プロセスからみた取り立て詞モ・デモ」『日本語の主題と取り立て』pp. 227-260 くろしお出版
- 高山善行(2003)「極限のとりたての歴史的変化」沼田善子・野田尚史編『日本語のとりたて—現代語と歴史的変化・地理的変異』pp.85-105 くろしお出版
- 中西久実子(1995)「モとマデとサエ・スラ—意外性を表すとりたて助詞—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)単文篇』pp. 306-316 くろしお出版
- 丹羽哲也(1995)「さえ」「でも」「だって」について」『人文研究』47-7 大阪市立大学文学部
- 沼田善子(1986)「とりたて詞」奥津敬一郎・杉本武・沼田善子著『いわゆる日本語助詞の研究』pp. 107-225 凡人社
- 沼田善子(2000)「とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子著『日本語の文法2 時・否定と取り立て』pp. 151-216 岩波書店
- 野田尚史(1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』pp. 1-35 くろしお出版

お出版

- 星野佳之(2003)「「さえ」の観点について一誤用例の検討を通じて」『清心語文』5 ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会
- 三井正孝(1997)「現代日本語に於けるとりたて詞サエの意味」『新潟大学国語国文学会誌』39
- 茂木俊伸(1999)「とりたて詞「まで」「さえ」について一否定との関わりから」『日本語と日本文学』28
- 山中美恵子(1991)「「も」「でも」「さえ」の含意について」『日本語と中国語の対照研究』14

用例出典

※用例調査には以下の資料を用いた。『日本古典文学大系』所収の作品については国文学研究資料館のデータベースを検索に利用した。

源氏物語、堤中納言物語、宇治拾遺物語、保元物語、平治物語、沙石集、曾我物語、義経記、御伽草子(24編)、近松浄瑠璃集(20編)、遊子方言、辰巳之園、通言総籙、傾城買四十八手、傾城買二筋道、軽井茶話道中粹語録、青楼昼之世界錦之裏、東海道中膝栗毛、浮世風呂、春色梅児誉美、春色辰巳園『日本古典文学大系』岩波書店／万葉集、古今和歌集『新編日本古典文学全集』小学館／蜻蛉日記、紫式部日記、更級日記、高野本平家物語『新日本古典文学大系』岩波書店／閑居友『閑居友 本文及び総索引』笠間書院／十訓抄『十訓抄 本文と索引』笠間書院／とはずがたり『とはずがたり総索引』笠間書院／土井本太平記『土井本太平記 本文及び語彙索引』勉誠社／湯山聯句抄『湯山聯句抄 本文と総索引』清文堂出版／天正狂言本『天正狂言本 本文・総索引・研究』笠間書院／天草版平家物語『天草版平家物語 語彙用例総索引』勉誠出版／天草版伊曾保物語『エソポのハブラス 本文と総索引』清文堂／虎明本狂言集『大蔵虎明本狂言集 本文篇』表現社、『大蔵虎明本狂言集 総索引』武蔵野書院／きのうはけふの物語『大東急記念文庫蔵 きのはけふの物語 研究及び総索引』笠間書院／醒醉笑『醒醉笑 静嘉堂文庫蔵・索引編』『同・本文編』笠間書院／雑兵物語『雑兵物語 索引』桜楓社

※現代語の用例については「新潮文庫の100冊CD-ROM」より以下の作品を用いた。カッコ内は本文中での略記である。

村上春樹『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』(世界)、谷崎潤一郎『痴人の愛』(痴人)、夏目漱石『こころ』(心)

付記

本稿は2004年12月に提出した修士論文の内容を再構成したものです。2005年3月12日の第79回関東日本語談話会で発表した際には、佐藤琢三氏、茂木俊伸氏をはじめ、参加者の皆様にも多くの示唆を頂きました。記して感謝します。

(すずき・ひとみ 大学院人文学系研究科 修士課程2年)